

## 近世後期の文人と煎茶

——頼山陽およびその諸芸術に関する考察を中心として——

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻 博士課程

島村幸忠 (6060256402)

### 学位論文の要約

本研究は、江戸時代の後期、特に文化文政期を中心に活躍した文人・頼山陽（名は襄、通称は久太郎、字は子成、山陽は号の一つで、他に三十六峰外史などがある。安永9〔1780〕年～天保3〔1832〕年）における煎茶の喫茶趣味の意義について考察するものである。その際、山陽が制作した漢詩や漢文、あるいは書画や建築などといった芸術作品のなかでも、特に煎茶に関するものを取りあげて、考察を進めていくこととする。それゆえ本研究は、おのずと山陽の芸術論の様相を呈してくることもなるだろう。

江戸時代前期に隠元隆琦をはじめとする臨済宗黄檗派の僧侶たちが中国より招来された。彼らが邦国にもたらしたものは、仏教界に限らず、食に関するものから芸術に関するものまで、その後の日本の文化に広く影響を及ぼすこととなった。それらのなかには、抹茶と異なる喫茶法、すなわち煎茶（葉茶を煮る法）も含まれていた。煎茶の喫茶趣味は、江戸時代の中期頃より文人と呼ばれる者たちを中心として、海内に伝播していった。頼山陽もまた煎茶

に魅せられた者の一人である。

ところで、日本の煎茶文化に関する研究は、いわゆる茶道、あるいは茶の湯に関する研究に比べて、その歴史の浅さを考慮したとしても、圧倒的に蓄積を持たない。特に、化政期から幕末にかけて活躍した文人に関する研究が進められておらず、その時代の文人に関する研究成果としては、榎林忠男の『碧山への夢』（1985年）と漆原拓也の「文人煎茶の盛衰」（2015年）の他に、田能村竹田に関する岩間真知子の「煎茶と文人画」（1998年）、船阪富美子による「館柳湾の漢詩にみる煎茶」（1999年）、「館柳湾と煎茶の師友」（2003年）、「田能村竹田の詩文にみる煎茶」（同前）などがあるのみである。また、山陽に特化して論じたものはいまだない。

以下では、各章で論じた内容をまとめるとともに、一連の議論を通じて明らかとなったことを簡潔に示しておく。

第1章「山陽の茶の湯批判再考」では、山陽による茶の湯批判を再考した。山陽の茶の湯批判については、すでにいくつかの先行研究において言及されてきたが、批判の理由が十分に明確化されていないと思われたからである。その際、本論では、山陽の「是奢侈を教るにあらず」という言葉を議論の端緒として、批判の背景に彼の歴史／政治思想があるのではないかと想定し、長古「煎茶歌」（文政6〔1823〕年）の読解を主に行った。その結果、山陽の茶の湯批判は、修史のなかで培った、耽溺、奢侈、過剰なしきたりに対する批判的な精神と並行関係にあること、が理解されたのである。むしろ、山陽において、茶事はそのようなものであってはならない。そのことをさらに明確化しておくために、続く第二章で「桐陰茶

寮記」の読解を行った。

第2章「『桐陰茶寮記』にみる山陽の煎茶観」では、1823（文政6）年に制作された「桐陰茶寮記」を中心に取りあげた。同記文は、これまで詳しく論じられてこなかったので、まず、その依頼者である小野桐陰および、その成立過程を跡づけておいた。「桐陰茶寮記」の要点は、桐陰茶寮の庭と桐についてと、その桐の姿になぞらえつつ語られる煎茶の楽しみ方についての記述にある。山陽によれば、煎茶の意義は「物外に心を游す」ことであった。ただし、決して茶事に耽溺するのではなく、忙しい日々の際間をみつけて、限られた時のなかで楽しむものであったのだ。ここから、「游心」の意味のさらなる解釈を行い、煎茶と芸術の創造行為について論じていくこととした。そこで、続く第3章や第4章では、主に山陽の漢詩の分析を行った。

まず、第3章「漢詩にみる煎茶」では、山陽の茶に関する漢詩を扱い、それらの作品のなかにしばしば登場する「茶声」に注目した。茶声とは、湯を沸かせる、あるいは茶を煎じるときに生じる音である。山陽は、幽玄な空間で聴くことのできる茶声を特に好んでおり、琴や笙の音色に、あるいは蟬の鳴き声に喩えて、漢詩に詠んでいたのである。このことは、煎茶を淹れるという行為が、詩想を与えるものであったこと、すなわち、詩的な行為であるということを意味している。ただし山陽には、そのような「茶声」を詠ったもの以外にも、煎茶に関する漢詩がいくつもある。そして、それらの漢詩に詠まれている情景はここで論じた閑寂なる世界観とは異なるものである。

第4章「煎茶を介した交遊」では、山陽と田能村竹田（安永6〔1777〕年～天保6〔1835〕

年)、そして雲華上人(安永2〔1773〕年～嘉永3〔1850〕年)とのあいだで交わされた交遊において、煎茶がいかに嗜まれていたのか、彼らの残した漢詩文を取りあげることで詳らかにすることを試みた。その過程において明らかとなったのは、多くの場合、煎茶は酒と対のものとして登場するということであった。その行為は、彼らより以前の世代における煎茶の楽しみ方とは異なるものであり、中国の文人の詩的世界の実現化に向けられたものであったことを指摘した。またその際、舟上における喫茶についても触れた。

第5章「煎茶室としての山紫水明処」では、山陽の終の住処となった水西荘内に建てられた煎茶室「山紫水明処」について再考した。茶の湯の茶室と異なり、煎茶室はその眺望に最大の特徴が認められるので、本章では、山紫水明処から望むことのできる東山連峰と鴨川の風景に重点をおいて論じた。その眺望は、山陽の目には、近世後期文人にしばしばみられた山水画的な風景としてのみならず、その他の近世人によくみられた行楽の地、さらには、幾多もの歴史的出来事が起こった場、の三つが重なり合ったものとして映っていた、ということをも漢詩の読解を通じて確認したのである。

第6章「化政期の文人と煎茶」では、以上までに行ってきた議論を踏まえ、山陽を相対化しておくために、竹田と青木木米の煎茶観について考察した。ここでは、特に、竹田の芸術論の要をなす「自娛」という概念に着目した。その結果、竹田における煎茶とは、自ら楽しむことを基本として、俗気を払い、養生へと繋がるものであり、他の芸術活動と並行関係にあるものとして語られる行為であった。また、ここでは、その竹田がおおきな共感をもって論じた木米も取りあげた。木米もまた「自娛」の煎茶を大切にしていた。そのことは木米の

書簡から十分に明らかである。木米については、その作陶についても論じており、喫茶法と急須の形状のあいだにあると思われる関係性について考察した。

最後の第7章「山水図および題画詩にみる煎茶」では、前章で論じた竹田と山陽との芸術に対する差異をさらに明確なものとするために、山陽の作画精神について論じた（もちろん、煎茶に関係する画作品も残されているからでもある）。山陽の画作品には、当時、竹田が批評しているように、ただその人品の高尚さを示すように、高峰が描かれているわけではない。本章では、「磊砢」という術語を中心に解釈していくことで、山陽の画作品には、彼の歩んだ人生や国家の情勢を憂う心もあわせて表現されているということを示した。

以上の通り、本研究では、まず、山陽の茶の湯批判についての考察から出発し、それと対照的に語られる煎茶の意義の明確化を試みた。その際、山陽が残した芸術作品の分析へと向かった。それは勿論、上田秋成の『清風瑣言』や『茶痕醉言』、あるいは田能村竹田の『泡茶新書三種』などのような煎茶書を山陽が残していないということにも拠る。その結果、山陽の漢詩や画作品の特徴をも、部分的ではあれ明らかにすることができたのではないだろうか。特に本論では、煎茶も含めて、山陽の諸芸術に対する、歴史／政治思想の影響を強調した。それは、これまでの山陽研究において、詠史詩の研究を除いて、両者が結びつけられて考えられる機会が少なかったように思われたからである。